

太陽を射たモグラ

——比較の視点から——

山田仁史

この動物「モグラ」はコガネムシの幼虫やジムシ、ミミズなどのように地下に通路・道路を掘りますが、それにもかかわらず哺乳類なのです。…民衆の無邪

気な観察によれば、コウモリもモグラも動物としての分類に馴染まない生き物であり、…それゆえとりたてて注目されるのだと考えねばならないでしょう。

M・バルテルス「いくつかの変わった生き物たち」
(一八九九)

一 日本の諸事例⁽³⁾

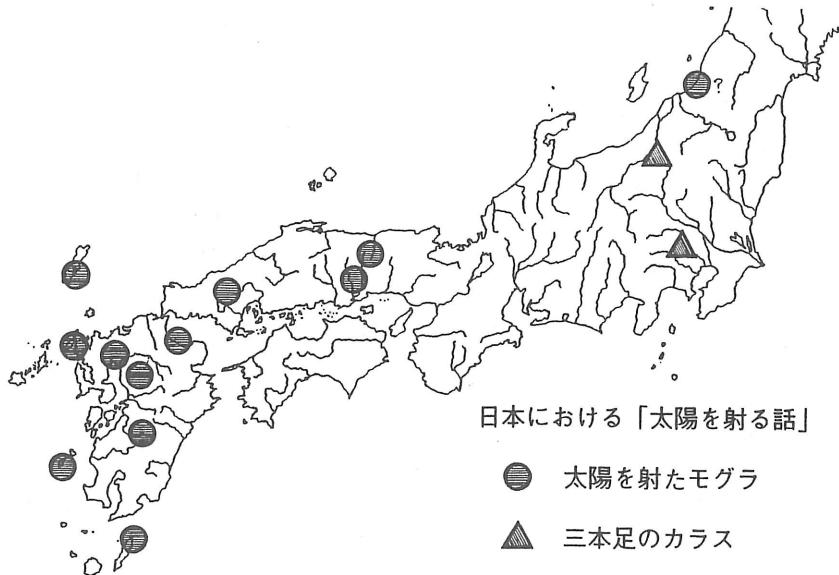
の問題に取り組んでみた。⁽²⁾以下では、日本における類話の在庫しらべ、国外の類話の提示、比較と解釈、という順序で探究をすすめたい。

日本における太陽を射たモグラの話は、一般的に次のようなモチーフからなりたっている。

- a モグラが太陽を射る、または、射る計画を立てる。
- b その罰として、モグラは日光に当たると死ぬ、または、地中に棲まねばならない。
- c モグラが弓矢として使った植物も罰を受ける。

「太陽を射る話」(射日神話、射陽説話)^(サキシツ)は岡正雄の研究(一九三五)によつて広く知られるようになり、日本の類話ではモグラが射手の役割を果たすことが関心を引いた。しかし、岡以来、日本における「太陽を射る話」の本格的な研究はまだ現れていない。⁽¹⁾そこでわたしは今回、モグラが射手として登場する話に焦点をしづり、こ

分布は、地図にみられるように中国・九州地方に集中している。⁽⁴⁾煩雑になるのを避けるため、特殊な事例についてのみ詳細を掲げる。



ことにしよう。

- 中国地方
- 1 島根県鹿足郡柿木村桃谷 d を欠く (酒井 (編)) 一九七九..
 - 2 岡山県 (伝承地不詳) 昔は太陽が七つ出ていたが、アマンジャクが松の切り株に腰かけて六つまで射落とした。それゆえ松の切り株からは芽が出なくなつた (時実 一九三〇)。
 - 3 岡山県吉田郡阿波村大畠湯谷 d を欠く (立石 一九七一..一〇二)。
 - 4 岡山県 (伝承地不詳) d を欠く (立石 一九八六..一二四..一二五)。
- 九州地方
- 5 福岡県豊前地方 d を欠く (梅林 一九三一..九一..一〇)。
 - 6 福岡県豊前地方 d を欠く (吉永 一九八一 (一九六二)..一四三)。
 - 7 佐賀県佐賀市高木瀬町八丁堀 d を欠く (佐賀市教育委員会 (編) 一九七六..五四)。
 - 8 長崎県下県郡美津島町黒瀬 b・d を欠く (京都女子大学説話文学研究会・日本女子大学有志・立命館大学有志・小松勝助 一九七五..七六..No.314。稻田・小澤 (編) 一九七九..一九〇..七八、による)。
 - 9 長崎県平戸市鮎川町 c・d を欠く。b に際して目が見えな

いようにされる（大谷女子大学説話文学研究会一九七八・一二一）。

- 10 熊本県玉名郡南関町 cを欠く（能田 一九三五・四四一四五）。

- 11 熊本県球磨郡湯前村（現・湯前町） cを欠く（丸山 一九三五・八）。

- 12 鹿児島県薩摩郡下甑村手打麓 モチーフすべてあり（岩倉一九四四・二〇〇一・二〇一）。

- 13 鹿児島県西之表市国上 モグラは太陽に顔向けできないような悪いことをしたため、いつも泥の中にはかりもぐつてある。悪事の罰だという（下野 一九八〇・八一・一八二）。

上に示した一三例のうち、2はモグラが現れない点で、また13は「射る」行為が語られない点で、特殊な事例である。残る一例を見てみると、モチーフdすなわちヒキガエルへの報恩モチーフは九州地方にしか出現せず、モチーフcすなわち植物への懲罰モチーフもしばしば省略されていることがわかる。

してみると、日本における太陽を射たモグラの話のほぼすべてに共通しているのは、モチーフa・bということになる。つまり「モグラが太陽を射る、または、射る計画を立てる。その罰として、モグラは日光に当たると死ぬ、または、地中に棲まねばならない」というのが、日本の諸事例の骨格なのである。

さて、ここで日本の外に目を向けてみよう。地図にみられるよう

に「太陽を射る話」はさまざまな地域から報告されているが、こうした中に、いま見てきたような骨格をもつ動物説話はあるのだろうか？

二 国外の諸事例

このことに関して、ドイツの中国学者・民族学者であるメンヒュンニ＝ヘルフェンがおもしろいことを言っている。彼によれば、モンゴルにおける太陽の射手マー・モットが地下に棲む獣であるのと同様に、北米の諸説話の中で太陽を射るアナウサギもまた、地面の穴の中に棲む獣だというのである (Münch-Helfen 1937: 89)。言うまでもなく、わが国のモグラも地下に棲む獣という点で共通している。いったい、この共通点はどのように説明されるのだろう？先を急ぐ前に、メンヒュンニ＝ヘルフェン説の確認から始めることにしたい。

(a) モンゴル——マー・モット⁽⁵⁾

まず、モンゴルにおける「太陽を射る話」はどのようなものだろうか？ロシアの旅行家で博物学者のグリゴリイ・ポターニンが、一八七〇年代におけるモンゴルでの調査旅行の途中、ウルガ（ウランバートル）のモンゴル人から聞いたのは、次のような話だった。

マー・モットはかつて狩人だった。そのころ四個の太陽があつた。四つの方角に一個ずつあったのだ。狩人は三個の太陽を射た。神は腹を立て、彼をマー・モットに変えた (Münch-Helfen



世界における「太陽を射る話」

1937: 89. Potanin を訳す。

ノの語には、この異伝がある。ボターリンの別の報告では「Erche Mergen たかひて、太陽と月とを射よかと思ひた。ブルハンの企みにより彼は射失ひしに敗失し、恥じ入てマーモットに姿を変えた」とわれており (München-Helfen 1937: 83. Potanin を引く)、米国の東洋学者オーウィン・ホーリーのヤンガル旅行記には「大昔、十二個の太陽があった。Tarabagh または Tarbaghan Bator、やなわちマーモットの英雄といふ名の名手が太陽のいくつかを射た。彼は死ぬとマーモットになった。今でも、マーモットを銃で撃つのはいいが、弓矢で射てはならない」という記述が出ている (Lattimore 1975 (1941): 289)。いずれも、太陽の射手が死後マーモットに変身したことを述べてある。

マーモットに変身する際に射手の親指が切断された、と語る話もセンガルには多い。ブリヤート族からのスマレフの報告では「世界創造の直後、弓の上手な Chara-Erche-Myrgen という英雄がいた。Burchan-Bakschi は三個の太陽を創ったが、それらの暑熱はあらゆるのを焼きくしてしまってほどだった。射手は、三個の太陽を射ねと誓ったが失敗し、手足の親指を切り落として地下に棲むマーモットに姿を変えて「もし誰かが自分のことを射たなら、自分はその者に災いをもたらすであろう」と誓った」(München-Helfen 1937: 82. Smolev を訳す)。トウベ (ハムート) 人のムジベヌコハノ=ヘルフン自らが採録した話によれば、「むかし三個の太陽があつた。ある名獵師がそれらのうちの一つを射ようとしたが失敗し

た。激昂して彼は自らの親指を切り落とし、地中にもぐってマー
モットになった」といふ (Männchen-Helfen 1937: 81-82)。

「」でマー モットとはどんな動物なのか、手許の辞書類で調べてみると「リス科の動物で、ユーラシア大陸産の大形・地下棲の一群の総称」であり、モンゴル産のものはタルバガンと呼ばれる (『広辞苑』第四版、一九九一)。つまりマー モットは地中に棲みトンネルを掘る動物なのである。また、そのトンネル掘り活動がしばしば農業や牧畜に対する障害要因として嫌われ、駆除の対象となる点でもモグラと似ている (マッキンノン 一九八六: 二四、今泉 一九八八)。

つまり、モンゴルにおける太陽の射手もわが国のモグラと同様、太陽を射たり射ようとした結果、地下棲の動物に変身していることがわかる。では、メンヒエン＝ルフエンが言及していたもうひとつ地域である北米においては、「太陽を射る話」はどのように語られているのだろうか?

(b) 北アメリカ——コットンテイル⁽⁸⁾

米国の人文化人類学者ロバート・ローウィが、一九一二年にコロラド東南部 Ignacioにおいて Southern Ute 族のインフォーマントから聞いた話は、次のようなものだつた。

射手は太陽の昇る場所に行つたが、太陽は彼の姿を見ると隠れてしまつた。クモが出て来て、自分の糸にくるまれと言う。彼がクモの糸にくるまつていると、果たして太陽が出て来る。射手は次々に矢を放つが、矢はことごとく燃え尽きてしまう。矢

がなくなつたので棍棒で殴りつけると、太陽の破片が落ちてきて地上は大火事になる。射手は頸に火傷を負い、さらに脚も焼かれて膝までの長さしかなくなる。おしまいに太陽は、射手への罰としてこのように言った。「おまえはこの世が終わるまでウサギでいなければならぬ。もう人間のままではいさせない。雪が降つたら誰でもおまえの跡をつけて殺し、食べることができるようにしてやる。子どもにさえからかわれるよう。わしを害したりするからだ」 (Lowie 1924: 59-62)。

この話においては、太陽の射手はコットンテイルといふウサギに変身させられている。コットンテイルとはどんなウサギなのか、ここで調べておく必要がありそうだ。まず手許の辞典によれば、コットンテイルは「ワタオウサギ」との和名を与えられ、また《cotton-tail rabbit》とも呼ばれることがわかる (『ランダムハウス英和大辞典』第一版、一九九四)。さて、そもそもウサギ目ウサギ科 (Leporidae) はノウサギ (hare) とアナウサギ (rabbit) とに大別される。前者は巣穴をとくに作らず、木の根元や茂みをねぐらとするのに対し、後者は地中に大規模な巣穴をつくり集団で生活するウサギである。そしてコットンテイルは《rabbit》に分類されることから明らかなように、アナウサギである。つまり、これも地下に棲む動物なのである。なお米国のカリリフォルニアでは、ワタオウサギ (コットンテイル) は樹木の苗を食害して植林計画に大きな混乱をもたらしている害獣であり、この点、モグラやマー モットの害獣と比較されるだろう (チャップマン、シュナイダー 一九八六、荒

俣 一九八七—九一V: |||||)。

このコットンテイルへの変身と、太陽を射たことの結果として明確に語られている例は、今のところ上記の一例しか見つかっていない。しかし、トリックスター的存在であるコットンテイルが太陽を射たこと、その結果として脚や頸に火傷を負うこと、落ちた太陽の火から逃げるため穴の中に逃げ込むこと、は数多くの話に現れている。

たとえば Northern Paiute 族においてイザベル・ケリーが一九三〇年の夏に採録した四話のほとんどにおいては、コットンテイルが太陽を射落としたため地上は大火事になり、彼は脚と頸すじに火傷を負い、アナグマの穴に逃げ込んだ、されど、(Kelly 1938: 422—428)。また、ローウィが採録した Paviotso 族の話では、コットンテイルは火鑓杵で太陽を射落としたが、火に追われて頸に火傷を負った。今でもコットンテイル兔の頸にはその痕がある、という (Lowie 1924: 224—227)。

Western Shoshone 族の伝承にも同じことが言える。ローウィの報告したアイダホ州 Lemhi の例では、コットンテイルは火鑓杵で太陽を殺したが、落ちて来る太陽がコットンテイルの頸と脚に黄色い斑点を焼きつけた (Lowie 1936 (1925): 272)。むろん、ショリーン・スチュワードが六か月間の民族学的調査期間中にカリフォルニア州 Saline Valley とネバダ州 Elko で採録した伝承においても、コットンテイルは射落とした太陽によって頸や脚などに火傷を負い、地面の穴の中に逃げ込んでいる (Steward 1943: 277—281)。

以上のように、北アメリカ (ことに大盆地文化領域) における「太陽を射る話」には、

1 太陽の射手は、落下した太陽の火から逃れるために地面の穴の中に逃げ込む、

2 その際、頸や脚に火傷を負う、

という特徴が見いだされる。そしてこの二の特徴は、太陽の射手が太陽の復讐なしし罰に遭い、地面の穴の中に追いやられた、とも解釈できる。そしてそう解釈することで、Southern Ute 族の事例とその他の事例との隙間はかなり近くなつてくる。
このように、北アメリカの事例においても、太陽の射手は自らの行為が原因で地下へ追いやられてしまうのである。

(c) 北東インディー——カエル

メンヒエン＝ヘルフエンが見過して、いた北東インディーに「太陽を射る話」が多数あることに気づき、わが国の学界に紹介したのは荒木博之 (一九七三) だった。同氏の挙げた資料を中心に、この地の伝承を検討してみることにしよう。

一九二五年にシッキムを訪れた人類学者のストックス女史は、レプチャ族のもとで次のような伝承を聞いた。

むかし二個の兄弟の太陽があった。交替で昇ったため夜が訪れず、人々は眠れず光熱に苦しんだ。食用ヒキガエルが赤いケイトウから矢を作り、兄の太陽を射殺した。弟の太陽は悲しんで黒い布をかかり、暗黒が訪れた。コウモリが隠れた太陽をそ

の鼻声でおびき出し、逆さまにぶら下がった姿で笑わせた。ヒキガエルは太陽を射た罰として親指を切り落とされ、冷たい場所に置かれた。死んだ太陽は月になつた。赤いケイトウが高く伸びる月には、太陽は射られるのを恐れて早く沈む (Stocks 1925, 363)。

ノリやは太陽を射たヒキガエルが、罰として親指を切断され、冷たい場所に置かれた、とされている。

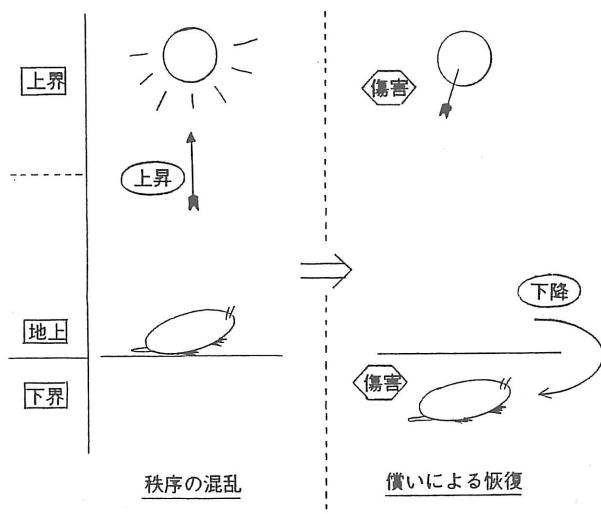
似たような話は、インド北東部のアルチャナル州 Siang 地区に居住するインド・ビルマ語系の Minnyong Adi 族から報告されている。そこでは、両眼から生まれた兄弟（異伝では姉妹）の太陽二つのうちひとつがカエルによつて射られて月になる。カエルは、太陽の怒りを逃れるため水中に棲むようになつた、という。また異伝には、恐怖のため身を隠した太陽をオンドリなどの動物たちが呼び出そうとするモチーフが加わつてゐる (Duff-Sutherland-Dunbar 1915; 66; Elwin 1958: 51–54)。

いうしてみると、北東インドの太陽の射手は地下に棲む獣ではなくて、「冷たい場所」に棲むヒキガエルや水中に暮らすカエルである。ここで注目に値するのは、

- 1 射手が自らの行為の結果として、地上から追放されていること
- 2 その際、親指を切斷される場合があること

の二点であつて、このことはすでに見てきたモンゴルや北米の事例と共に通しているのである。いつたいこの共通点はどのように説明さ

れるのだろうか？ いよいよ、これまで挙げてきた諸事例の比較と解釈に移ることにしよう。



動物説話としての「太陽を射る話」の構造

三 比較と解釈

神話や昔話といふものは多義的な解釈をゆるすテクストである。したがつてここではいくつかの観点から比較と解釈を試みてみたい。

まず、日本・モンゴル・北アメリカ・北東インドという互いに離れた諸地域に似たような話が存在することを過去における伝播の結果とみることが考えられる。その可能性はあるにしても、伝播の時期と扱い手に関してはほとんど何もわかつていないので現状である。ここでは憶測はさしひかえておこう。⁽¹⁾

次に、話の構造に目を移すなら、

1 太陽の射手は自らの行為の結果、懲罰なしし贖罪として地上から追放され、地下とか水中とかに棲むようにさせられる、

2 その際、盲目化（日本の事例⁹）、親指の切断（モンゴル・北東インド）、頸や脚への火傷（北アメリカ）というように、身体に欠陥を負わされる、

という共通点が見いだされる。そしてこのことは、次のように解釈することができる。

つまり、図に示したように太陽を射て秩序を乱した者は、その罪を償わなければ秩序が恢復されない。太陽を射る矢の上昇、太陽に対する傷害、という二つの懲罰なしし贖罪の行為によつて補償されるのだ、ということではないだろうか。こう考えてみると、動物説話として傷

の「太陽を射る話」には注目すべき構造上の一一致がみられるといえるのである。

最後に、太陽を射る者としてモグラやマーモットやコットンティルが選ばれたのはなぜだろう？ まず、これらはすべて地下に棲むという特異な生活形態が観察された。そして、それは実は太陽に反逆したことへの罰なのだ、という説明が考え出された——あるいはすでに存在した太陽の射手の伝説と結びつけられた。そしてその際に、モグラの盲目性、マーモットの親指の短小性、コットンティルの短い脚や頸の模様（あたかも火傷を思い出させるような）がどうしてできたか、という説明がつけ加えられた。このような事情を想像してみることができるだろう。

また、これらが地上と地下を媒介する動物であることと、カエル——日本と北東インドでは太陽との関係が逆転しているが——が陸と水を媒介する動物であること、も想起されてよいであろう。さらにまた、北東インドの伝承においてオンドリが太陽を呼び出す役目を担っているのも、伝承の作り手・語り手・聞き手たちの現実感覚に基づいているのももちろんのことであろう。そしてこうした現実感覚こそが身近な動物たちを神話や昔話の中に登場させたのであり、その意味で神話や昔話は器用仕事の産物なのである。

附記

本稿は、修士論文（山田 一九九七）の第三章「日本における『太陽を射る話』」のうち、太陽を射たモグラにかかる部分を大幅

に書き改めたものである。

本稿の内容のあらましは、日本民族学会第九回近畿地区研究懇談会（一九九七年三月八日）、第三回日本民族学会研究大会（同年五月二二日）、日本口承文藝學會第二回大会（同年六月八日）において口頭発表した。これらのうち、静岡市の常葉学園短期大学で開かれた口承文藝學會大会の会場においては、伊藤清司先生（慶應義塾大学名譽教授）と百田弥栄子先生（アジア民族造形文化研究所）から貴重なコメントをいただいた。心から感謝申しあげたい。

註

(1) 岡正雄以前にもすでに、島津久基（一九一九）、南方熊楠（一九三〇）、中山太郎（一九三四）が日本における「太陽を射る話」の研究を発表していた。しかし太陽を射たモグラに着目したのは岡の功績だった。

（2）日本における「太陽を射る話」は、二つに分類することが可能である。ひとつはここで取り上げるような太陽を射たモグラの昔話であって、『日本昔話大成』では「七三 土龍と蛙（太陽を射る話）」、『日本昔話通観』では「五〇八 もぐらと太陽」という話型番号をそれぞれ与えられているのだ。もうひとつは三本足のカラスが化けた太陽を弓の名手が射落とすという伝説で、『日本伝説大系』において「一一 太陽を射落とす」という話型番号を付されたものである。後者については、萩原法子氏（柏市文化財保護委員）からの私信の中で多くのご教示を得たが、紙幅の関係上本稿では扱えない。別の機会に詳論したい。

（3）日本の諸事例の多くは『日本昔話大成』や『日本昔話通観』に挙げられているものだが、事例8以外については原資料までさかのぼって原文を確認した。原資料の閲覧を快くお許しください。た稻田浩二先生（京都女子大学名譽教授）に心から感謝申しあげる。

（4）ただし新潟県岩船郡荒川町からは、怠け者のモグラが罰として地中に暮らすようになれる、という話が報告されている（大谷女子大学説話文学研究会一九八七・一九八）。

（5）モンゴルの諸事例についてはメンヒュン＝ヘルフュンの研究（Mädchen-Helfen 1937）に負うところが大きい。事例の多くはこれら先学の研究成果に多くを負っている。また、『日本昔話大成』（関ほか 一九七八一八〇）、『日本昔話通観』（稻田・小澤（編）一九七九一九〇）、『日本伝説大系』（荒木・野村・福田・宮岡正雄（一九三五））によって紹介されている。

田・渡邊（編）一九八二一九〇）の学恩にも感謝したい。こうしてすぐれた資料集成がなければ、この研究は困難だつたらう。

(6) 実際、リス科の動物（マー・モットはリス科）の親指はあまり発達しておらず、マー・モットには親指がないとも言われている。ようだ（マッキノン一九八六：一四、荒俣一九八七—一九一七：一九八）。したがって以下の話はマー・モットの身体特徴の由来譚である。

(7) フー・ハルトによれば、モグラとマー・モットが同じ役割を演じる話が北米にある。すなわち、原初は地に住んでいた人間たちが地上に出て来た時、同行しなかった動物がいたが、それはポーリー族ではモグラ（das virginische Murmeltier）だつたのである（Dähnhardt 1910: 269.

Ginnel だらけのモード）。話のあと参照せよ。
(8) ポトメリカの諸事例については荒木博之の資料集成と紹介（一九七三）に負うところが大きい。

(9) なお、(1)の話ではショーンテイルが頭で空を押し上げたとされているが、同じ北米のWashosk族では、かつて低かった天を手

で持ち上げたのはモグラである（Dähnhardt 1910: 269. Kroeber や Dähnhardt, Oskar 1910 *Natursgen*, Bd. 3: Tiersagen, 1. Teil. Leipzig: B. G. Teubner.

Duff-Sutherland-Dunbar, George 1915 Abors and Galongs, part 1: Notes on certain hill tribes of the Indo-Tibetan border. *Memoirs of the Asiatic Society of Bengal*, vol. 5 (extra no.): 1–86.

Elwin, Verrier 1958 *Myths of the North-East Frontier of India*. Shillong: North-East Agency.

(11) 「太陽を射る話」の原型は、原初に存在した二個の太陽のうち

の一個が射られて月になった、という天空の秩序づけを説明する神話だったとわたしは考えている。本稿でみてきた諸事例は、こうした原初的形態が動物説話へと変化したものであろう（山田一九九七）。

引用文献
荒木博之 一九七三「太陽を射る話」『話研究と資料』11: 四二一—六三一。

荒木博之・野村純一・福田晃・宮田登・渡邊昭五（編）一九八二—九〇『日本伝説大系』全一五卷・別巻11、東京：みやわみ書房。
荒俣宏 一九八七—九一『世界大博物図鑑』全五巻、東京：平凡社。
チャップマン、ショナ・イダーラ（Chapman, Joe A. & Eberhard Schneider）一九八六「アナウサギ、ノウサギ」今泉吉典（監修）『動物大百科』五、小型草食獣 東京：平凡社、一三〇—一三七頁。

Dähnhardt, Oskar 1910 *Natursgen*, Bd. 3: Tiersagen, 1. Teil. Leipzig: B. G. Teubner.

Duff-Sutherland-Dunbar, George 1915 Abors and Galongs, part 1: Notes on certain hill tribes of the Indo-Tibetan border. *Memoirs of the Asiatic Society of Bengal*, vol. 5 (extra no.): 1–86.

Elwin, Verrier 1958 *Myths of the North-East Frontier of India*. Shillong: North-East Agency.

Erkes, Eduard 1926 Chinesisch-Amerikanische Mythenparallelen.

T'oung Pao 24: 32–53.

今泉吉晴 一九八八「^{アーチャー}『日本大百科全書』」(1) 東京：

小学館。一一七頁。

稻田浩一・小澤俊夫(編) 一九七九一九〇『日本昔話通観』全二九

卷、京都：同朋舎出版。

岩倉市郎 一九四四『鶴島昔話集』(柳田國男編、全国昔話記録) 東

京：三省堂。

金閥丈夫 一九四八「太陽を征服する伝説」『公論報』一九四八・五

・一〇一五・一七。のち、大林太良(編)『新編木馬と石牛』

(岩波文庫) 東京：岩波書店、一五一三(1)頁に再録。

——— (訳注) 一九七八「^{ハバーハルト}射人」『東洋學術研究』一七(1)。のち、同著『お月やまくべ』東京：法政大学出版局、一五八一―九二頁に再録。

Kelly, Isabel T. 1938 Northern Paiute tales. *Journal of American folk-lore* 51: 363–438.

Kühn, Alfred 1936 Sonne und Mond in den Mythen der

Indochinesen. *Artibus Asiae* 6: 73–90.

京都女子大学説話文学研究会・日本女子大学有志、立命館大学有志

・小松勝助 一九七五一七六『対馬稿』未刊。

Lattimore, Owen 1975 (1941) *Mongol journeys*. New York: AMS Press.

林衡立 一九六二「台灣土著民族射日神話之分析」『中央研究院民族学研究所集刊』一三：九九一―一一。

Lowie, Robert H. 1924 Shoshonean tales. *Journal of American folk-lore* 37: 1–242.

——— 1936 (1925) *Primitive religion*. London: George Routledge & Sons.

マッキノン, カスティ(マックニン, Kathy) 一九八六「^{ニク}今泉吉典(監修)『動物大百科』五、小型草食獣』東京：平凡社、一四一三五頁。

Mädchen-Helfen, Otto 1937 Der Schuß auf die Sonnen. *Wiener Zeitschrift für die Kunde des Morgenlandes* 44: 75–95.

丸山学 一九三三「球磨民話抄(因)」『昔話研究』一(八)：一三九。

南方熊楠 一九三三〇「アーハンジャクが日を射落とした話」『岡山文化資料』一(五・六)。のち、『南方熊楠全集』四、東京：平凡社、一九七一。五八四一五八七頁に再録。

百田弥栄子 一九八八「射日・招日にかかる鍛冶文化の諸相」『説話・伝承学会(編)『説話・伝承学』88 説話の始原・変容』東京：桜楓社、四八一七八頁。

中山太郎 一九三三四「太陽を射落す話」『旅と伝説』七(1)。のち、同著『民族点描』京都：人文書院、一九三三七、四五一四九頁に再録。

能田太郎 一九三三五「玉名郡昔話(一)熊本県玉名郡南関町」『昔話研究』一(一)：四一—四六。

荻原(小川)眞子 一九七七一七八「アムール川地域の射日神話」

『国際商科大学論叢』一六：一—九一—三〇、一七：九—一四。
のや、同著『北方諸民族の世界観——アイヌヒアムール・サハリ
ン地域の神話・伝承』東京・草風館、一九九六、五八—八九頁、
に再録。

岡正雄 一九三五「太陽を射る話」『昔話研究』一（大）。（40、大
林太良（編）『岡正雄論文集 異人その他 他十一篇』（岩波文
庫）東京・岩波書店、一九九四、110）一一—七頁、に再録。

大谷女子大学説話文学研究会 一九七八『（昭和五十一年度採訪報
告 長崎県平戸市）平戸市昔話集』富田林・大谷女子大学説話文
学研究会。

一九八七『（昭和56・57年度採訪報告 新潟県岩船郡）

荒川町昔話集』富田林・大谷女子大学説話文学研究会。
佐賀市教育委員会（編）一九七六『わがの民話』佐賀・佐賀市教育
委員会社会教育課。

酒井董美（編）一九七九『日本の昔話』一七、岩見の昔話』東京：
日本放送出版協会。

関敬吾ほか 一九七八一八〇『日本昔話大成』全一一卷、東京・角
川書店。

島津久基 一九二九「太陽を射る話」『羅生門の鬼』東京・新潮社。
のや、同著『羅生門の鬼』（東洋文庫、二六九）東京・平凡社、一
九七五、一八五一〇一頁、に再録。

下野敏見 一九八〇『昔話研究資料叢書』一七、種子島の昔話、
一』東京・三弥井書店。

Steward, Julian H. 1943 Some Western Shoshoni myths.

Anthropological papers, no. 31 / Smithsonian Institution,

Bureau of American Ethnology, Bulletin 136: 249-299.

Stocks, C. de Beauvoir 1925 Folk-lore and customs of the Asiatic

Lap-chas of Sikhim. *Journal and proceedings of the Asiatic*

Society of Bengal (n. s.) 21: 325-505.

立石憲利 一九七一『岡山県阿波村の昔話』自刊。

一九八六『美作の民話』（民話の手帖 別冊）東京：日本
民話の会。

時実黙水 一九三〇「トマノシヤク」『岡山文化資料』一（四）：11
二八。

梅林新市 一九三一『豊前民話集』福岡・福岡土俗玩具研究会。

山田仁史 一九九七『太陽の射手——日本・台湾と周囲諸民族にお
ける「太陽を射る話」の比較研究』京都大学大学院人間・環境学
研究科（文化人類学講座）修士論文（一九九六年度）、四十六二七
頁、未刊。

吉永雪堂 一九八一（一九六一）『豊前の民話』藤真沙夫（編）『豊
前叢書』六、東京：国書刊行会、五七一—五〇頁。

（やまだ・ひとし／京都大学大学院）